
東京マグニチュード8.0二次創作 「二学期の、出来事」

機械科ボイラーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京マグニチュード8.0 二次創作 「二学期の、出来事」

【Nコード】

N9233K

【作者名】

機械科ボイラース

【あらすじ】

本編最終話後の、ユカの話です。内容的には「7月20日」の続編にあたります。

（前書き）

本編最終話後の、ユカの話です。内容的には「7月20日」の続編にあたります。

ユカ

件 大丈夫！？

東京、すごい揺れた
んでしょ！？

今、静岡のお婆ちゃん
ちに来てて心配に
なって！！

連絡待ってます！！

マユ

件 Re：大丈夫！？

やっと繋がった！私
は大丈夫！家族も全
員無事！ユカも大丈
夫そうで、本当良か
った！！

それと、未来にも会
ったよ！地震のとき
弟君とお台場の方行
ってみたいで、ず
っと連絡取れなくて

心配だっただけど
、この前近所の公園
でたまたま見かけて
！本当良かった！！

マユ

件 悲しいよ

未来の弟君、亡くな
ったんだって……。
さっき、未来のウチ
に行ってきた……。
未来、本当つらそう
で、見てられなかつ
た。私、どうしたら
いいかわからなかつ
た……。

ユカ、学校始まった
ら、私たちで未来の
こと、励ましてあげ
ようね。早く未来に
元気になって欲しい
よ。

未来

件 Re：大丈夫！？

連絡が遅れてごめんね。地震のときに携帯なくしちゃって、連絡できなかったんだ。

でも、そのときすぐお世話になった人に、携帯を届けてもらったの。

連絡が遅れたのはそういうわけだから、私は大丈夫。いろいろ大変だったけど、どこもケガとかしてないから。

ユ力はまだ静岡にいるの？学校、いつから始まるのかわからないけど、早く学校始まるといいね。早く学校で会いたいね。

教室に入って最初に目に入ってきたのは、クラスメイトの机の上に置かれた花瓶だった。今まで机の上の花瓶なんてタチの悪い冗談に使われるものとは思ってなかったけど、今はもうそんな風には

考えられない。あの地震は、本当にあつたことなんだ。あの地震で、本当にクラスメイトが死んじゃったんだ……。あまり話したことのない子だったけど、それでもクラスメイトが亡くなったことは本当にショックで。地震後の初めての登校日。長い長い夏休み明けの、ようやくの二学期初日。ユカは教室に入って、改めてそのことを痛感した。

「ユカ！」

教室に入ってきたユカに最初に声をかけたのは、未来だった。

「み、未来！？」

ああ、本当に未来だ。本当に久しぶりの、未来の声だ。今まで、ずっと未来に会ったら、最初になんて声をかけようかって悩んでた。何しろ、弟を亡くしてしまったのだ。きっと未来、すぐく落ち込んでいる。元氣のない未来の顔を見たら自分もつらくなる。ずっと、そう思ってた。でも、実際に未来の顔を見たら、そんな考えは吹き飛んでしまった。だって、未来が笑顔だったから。だったら、あたしも笑顔で応えないと。ユカはそう思った。

「ユカ、本当久しぶり！ 元氣だった！？」

「うん、本当久しぶりだよ、未来、学校来るの早いね！？ あたしもけっこう早めに出てきたのに」

一学期の頃の未来は、登校時間はかなり遅い方だった。ときどき遅刻しそうになって、教室に慌てて駆け込んでくることもあった。「もうちょっと早くウチを出ればいいのに」とマユに言われた未来が、「だって一分でも長く学校にいたくないんだもん」と嫌そうに答えていたのを思い出す。

「うん、なんかさ……早くみんなの顔を学校で見たいな、って……」

うわあー。未来が、未来がすごく良いこと言ってる……ユカは感極まって、気がついた時には未来に抱きついてしまっていた。

「未来！ あたし、未来の友達で、本当良かったよ！」

「ちよつ、ユカってば、もう」

ああ、なんだろう。今まで意識してなかったけど、なんだかすごく大切な時間を過ごしている気がする。

「でも、未来が元気そうで良かったよ、あたしてつきり、未来すごく落ち込んでるんじゃないかって」

あ。い、言ってしまった……。その瞬間、未来の顔が曇るのを見逃すほどユカも鈍感というわけではなく。思わず黙り込んで、恐る恐る未来の表情を覗き込むような形になってしまった。ど、どうしよう……あたしのバカバカ。

「……うん。弟のことでしょ？ 大丈夫。あたしは大丈夫だから、そんなに気を遣わないで」

「う、うん……ごめん……」

未来は大丈夫だって言ってるけど、そんなわけないよね……あたし、本当、無神経だ……せつかく久々に未来に会えたのに、この後どういふ話をしたらいいんだろう……などと後悔の念に苦しむユカを救ったのは、教室に入ってきたマユの声だった。

「未来、ユカ、おはよ！ 久しぶりー！」

「あ、マユ！ おはよ！」

「おはよー！ マユも本当久しぶりだよ、会いたかったよ、マユ」

「あはは、よしよし。良い子良い子。でも、本当久しぶり。ユカが相変わらずで、なんか学校来たなーって気がするよ」

「えー、何それどういう意味？」

「べつにー。そのまんまの意味だから、気にすんなって」

「ぶーぶー」

ああ、いつものあたし達のノリだ。マユ、ナイスタイミング。マユってこういうとき、いつもあたしを助けてくれるよね。マユと友達で、本当に良かったよ。ついさっき、未来に言ったことと同じことを、マユに対しても思うユカだった。

「あはは。でも本当、ユカもマユも、元気そうで良かったよ。なんかホッとした」

「……未来も、元気そうで良かった」

「……うん」

ああ、マユの気の使い方って、すごく自然で良いなあ……やっぱり幼馴染だからなのかな。マユって本当すごいなあ。

「ところで未来、学校来るの早いね？」

「もうー、マユまでユカと同じこと言うの！？」

「あはは、そうそう、あたしも教室入ってビックリしちゃったよー」

大丈夫、大丈夫。きっとあたし達は、やっていける。前と同じように、三人でバカなこと言って、ふざけあって、笑いあって、仲良くやっていける。ユカはこのときは、そう思っていた。

あくる日の放課後、三人で一緒に未来の家に行つて、仏壇にお線香をあげようということになった。ユカがずっと静岡に居て連絡が取れなかったので、未来の弟の葬式には出られなかったからだ。マユは葬式には出席していたのだけれど、ユカが行くのなら自分も、ということであつていくことになった。こうして、三人で未来の家に向かつている最中のことである。

「この辺りもずいぶん建物が壊れてるんだね……」

走行中のバスの窓から見える風景を見て、ユカがぽつりとつぶやいた。静岡に居てテレビで震災の映像を見ていたときもショックを受けたものだけど、東京に戻つてきて自分の目で被災した街並みを眺めると、言いようのない寂寥感を感じる。まるで自分が生まれ育つた街ではないようだった。

「本当、大変だったんだ……」

地震が起きたとき、ユカはたまたま静岡の祖母の家にいて、難を逃れていた。家族も全員無事だった。東京に戻ったときも、家の中は倒れた家具や割れた食器などでメチャクチャだったけれど、家自体は無事だった。おそらく東京在住者の中では、今回の地震で最も幸運だった部類の人間だろう。しかしそのせいか、地震発生時に東京にいて震災の直撃を受けた人達に対して、ある種の申し訳なさを感じてしまった。一番大変だった時期に東京にいなかった自分が、多少でも落ち着きを取り戻した頃にこのこと戻つてきて、のん気に学校に通つていていいんだろうか……などと考えてしまう。

「大変つていえなさ……トイレが一番大変だったね」
「へ？ トイレ？」

マユの唐突な発言。意外な話の流れに、オウム返しに訊き返すユカ。不幸なことに、このとき未来が露骨に眉をしかめたことに、ユカもマユも気がついてはいなかった。

「うん、どこの家もトイレが使えなくなっちゃってさ」

「ああそうか、水道とか全部ダメになっちゃったんだもんね」

「そそ、だから近所の人はみんな公園の仮設トイレ使ってたんだけどさ、もう毎日毎日長蛇の列で」

「うへー、それは大変そうだね」

「ほんと大変だったよー。ヤバイと思ってから並んでたんじゃ間に合わないくらい。だから途中から決まった時間になったらトイレに並ぶ習慣がついちちゃってさ、おかげで今でも何もなくてもトイレに行きたくなっちゃうように……あれ、未来、どったの？」

全く会話に参加してこない未来の方をふと見ると、あろうことが、未来があからさまに悲痛な表情を浮かべているではないか。思わずバツの悪い表情をしてしまうマユ。アイコンタクトで『NG！』この話NG！』と訴えるユカ。

「み、未来……ごめん、あたし、なんかまずいこと言っちゃった？」

「いや、ちょっと……嫌なこと思い出しちゃって……」

ど、どうしよう……未来、すごく嫌そうな顔してる……トイレの話ぐらい大丈夫だと思ってたけど……。もう未来の前で、地震に少しでも関係のある話はしない方がいいのな……。

「いいの、もう。気にしないで。とにかく気にしないで」

あああああ。未来、すごく気にしちゃってるよおおお。猛烈な罪悪感に苛まれる、ユカとマユ。今度から未来の前では、雑談の話題選びは慎重にしようと誓う二人だった。

三人がバスを降りて徒歩で未来の家に向かっていると、小学校が見えてくる。未来もマユも、そして未来の弟の悠貴も通っていた小学校だ。ここも、地震の避難所になってたんだよね。校舎を眺めつつ思うユカだが、震災直後の凄惨な状況を体験していないユカには、いまいち実感の伴わない想像しかできない。

無言で歩き続けて、フェンス越しに植木が茂る校庭が見えてきたところで、未来が自己紹介をするときのような改まった様子で、提案してきた。

「ちょっと、寄って行っていていいかな」

ユカとマユは顔を見合わせる。特に断る理由はなかった。

水を汲んだジョウロを手にも未来が向かう先は、校庭の一角に植えられた幼木だった。まだ植えて間もないらしく、根元の土と土の境目がはつきりとわかる。傾けたジョウロから水が注がれると、水の重みで揺れる掌状の葉から、陽光を反射する水滴が滴った。

「トチノキ……かな」

「ユカ、よく知ってるね。フランス語だとマロニエっていうんだっ

て。弟はそっちの名前で呼んだ」

幼木の前にしゃがみ込んで、遠くを見るような目をして話す未来。

「夏休みの一日前にね……弟と一緒に植えたんだ」

夏休みの一日前。つまり、あの地震の一日前だ。

「学校の帰りにね、ここにこうして水をやりに来てるの。なんだかここに来たら、弟に会えるみたいな気がしてさ……。はは、そんなわけないんだけどね」

そう言っただけに笑う未来は、ユカがまだ見たことのない未来だった。どうしてだろう、未来はこんなに近くに感じるのに、どこか別の場所から話しかけてきているみたいに、遠くに感じる。まるで十年後からタイムスリップしてきた未来と話しているみたいだった。

「優しいんだね、未来」

そんな未来に、穏やかな口調で話しかけるマユ。ユカは何も言わなかった。頭の中に、未来にかける言葉が思い浮かばなかったからだ。

「……そうかな」

「そうだよ」

未来とマユの間には、まるで自分の周りとは違う空気が流れているみたいだった。どうしてマユは、今の未来にそんなに自然に優しい言葉をかけられるんだろう。ユカには今の未来がどんな感情を堪えてきてこの場所まで辿り着いたのかまるでわからなくて、じつと

二人を見守っていることしかできない。やっぱり幼馴染だからなのかな。それとも、あの地震と一緒に体験しているからなのかな。ユカにはわからない。

「行こっか。ごめんね、付き合わせちゃって」

立ち上がって、歩き出す未来。ユカは黙って未来の後をついていくことしか、できなかった。

「ただいま」

「お邪魔します」

「……お邪魔します」

未来の家は、傾斜地に合わせて建てられたマンションである。地震でもほとんど無傷だった。弟を亡くした未来だが、住む家まで失わなかったのは、不幸中の幸いと言えるのかもしれない。帰宅した未来が友達を連れてきているのを見た母親は、顔をほころばせた。

「おかえり、未来。マユちゃんも、いらっしやい。そちらのお友達は、初めてね」

「ユカだよ、ママ」

未来が母親に紹介する。ユカは、初めての未来の家の訪問に、すごく緊張していた。

「は、初めまして、お邪魔します」

「いらっしやい、ユカちゃん。ゆっくりしていいってね」

挨拶した後、実は未来の母親と会うのがこれが初めてではないことに気がついた。中学の入学式の時、入口の前で転んでいた人がいたのを思い出したのだ。それが確か、未来のお母さんだ。あのときの未来はまだ友達になる前だったけれど、とても大きな声で恥ずかしがっていたので、よく覚えている。

お母さんも、きっとすごく悲しい思いをしたんだよね……。そう思うと、ユカの会釈はどこかきこちなくなってしまうた。

「あの、これ、つまらないものですがっ」

用意していた菓子折りを差し出す。何しろこういうことは初めてなので、軽いパニック状態である。

「あらあら、そんなに気を使わなくてもいいのに」

「いえ、その、気持ちですからっ」

「ありがとう、ユカちゃんが来てくれて、あの子も喜ぶと思うわ」

仏壇の前に案内されて、ユカは初めて未来の弟の、悠貴の写真を見た。小学校の入学式の際のものだろうか、写真の中の悠貴はあどけない笑顔を浮かべている。夏休み前、マユと一緒に一回会ってみたいねって話してたのにな……。まさか初めて未来の家に来るのが、こんな形になるとは思ってもみなかった。

ロウソクと線香に火を灯し、線香の火を手であおいで消す。煙の香る線香を香炉に立てて、合掌すること数秒。こうして、未来の家に来た目的は、ずいぶんあっさりと達成されてしまった。こんな感じで良かったんだろうか。なんだか形ばかりの弔問になってしまったような気がする。

「じゃあ、あたし達は部屋に行くから」

「うん。マユちゃん、ユカちゃん、今日は来てくれて本当にありがとうね」

母親に礼を言われはしたものの、それに値するようなことを自分がしたとは思えなかった。自分は何もしていないのに、作法に任せただ半ば自動的な流れで、何もかも終わってしまった。気持ちが状況に追いつかないまま、未来に促されて、未来の自室に足を踏み入れる。目に入ってきたのは、二段ベッドと二つ並んだ学習机。その一方を誰が使っていたものなのか、考えるまでもなかった。

「この机……弟君、のだよね」

未来はこの部屋で、ずっと弟君と二人で一緒に、寝たり起きたり、勉強したり遊んだり、お喋りしたりケンカしたり、泣いたり笑ったりしてきたんだよね。どんな気持ちなんだろう。同じ家に生まれてきて、それからずっと一緒に過ごしてきた家族が、突然いなくなったら、どんな気持ちになるんだろう。

「……うん。なんか、片づけられなくってさ」

寂しげな声で答える未来。ああ、まただ。未来にこういう顔をされたら、きつとまたあたし、何も言っただけられない。

「無理に、片づけなくてもいいんじゃないかな……ゆっくり弟君のことを考えてあげればいいと思うよ」

マユは、すごいと思う。マユは未来の言葉をちゃんと受け止めて、ちゃんと言葉を返してあげられる。あたしにはなんにもできない。ねえ、マユ。あたし、どうすればマユみたいになれるのかな。

気がつけば、マユの言葉に、未来の背中が沈黙していた。やがて、鼻をすする音が聞こえてくる。未来は、泣いていた。ユカには、ようやくわかった。やっぱり、悲しいんだ。当たり前だ。頭ではわかっていたつもりだった。でも、心ではわかっていなかった。ただの想像でしかなかった。でも、今、目の前の未来は泣いている。目の当たりにして、ようやくわかった。未来は、弟君がいなくなって、悲しくて、泣いてるんだ……。

しばしの間、ユカとマユは肩を震わせる未来の背中を見守っていた。長くはなかったが、決して短くもない時間が流れた後、未来はゆっくりと振り返った。

「ごめん……もう平気なつもりだったんだけど……弟がいなくなっ
てから、あたしずっとこの部屋に一人だったから……二人が来てく
れて、ホッとしちゃったのかな……。はは、ごめんね」

涙を拭いながらそう言って笑う未来の顔は、とても儚げで。触れ
たら崩れてしまいそうなくらい、頼りなくて。

「……我慢しなくてもいいよ。こういうときはさ」

それでもやっぱり、あたしはマユみたいに優しい言葉はかけられ
ない。あたし、友達甲斐のない奴なのかな。あたし、もしかしたら。
薄情な人間なのかな……。

ユカは一人、走行するバスに揺られて帰路に着いていた。本当はこんなに早い時間に帰る予定ではなかった。遊びに行くわけではないとはいえ、初めての未来の家なのだし、もう少しゆっくり話したいと思っていた。でも、無理だった。ユカは、未来の悲しみの深さを覗いてしまった。とても直視できなくて、目をそらすことを選んでしまった。あの部屋で未来と話なんてできる気がしなかった。マユを残して、逃げ出すことを選んでしまった。別れ際の未来の言葉を思い返すと、心苦しくてたまらない。

えっ、ユカ、今日ピアノのレッスンだったの？ そっか、時間ないのに来てくれてありがとうね。

帰り道、大丈夫？ 送ろうか？ 気をつけて帰ってね。じゃあまた明日、学校で。

本当はピアノのレッスンなんてなかった。ピアノは地震のときに壊れてしまって、修理中だ。ライフラインの復旧も済んでいない地域もあるこのご時世、ピアノの修理なんて終わるのがいつになるのかもわからない。だから地震が起きて以来、ユカはずっとピアノを弾いていなかった。ユカは初めて、未来に嘘をついた。

地震が起きる前は、ピアノのレッスンなんて面倒なものだと思っていた。ピアノ自体は嫌いではないけれど、毎日毎日何時間もピアノを弾いていたら、正直ゲンナリしてくることもある。努力したからといって絶対にピアニストになれる保証もないのだし、だったら練習なんてほどこでもいいんじゃないか、ピアノなんて楽しんで弾ければいいんじゃないかとも思っていたのだ。

でもいざピアノから離れてみると、毎日が空虚で退屈で仕方がなかった。ピアノから離れて初めて、自分が他に頑張っていたことなんて何もないのだということに気がついた。突然自分が無価値な人間になったように思えた。

バスの窓から反対車線を見ると、道路の補修工事が行われていた。地震の爪痕は、人々の努力によって、徐々にではあるが、消えつつある。危険な建物の解体作業も、街を見回せば見つけるのに苦労しない。ボランティアの人達も未だに各所で頑張っている。きつと悲しい思いを抱えながら働いている人も、たくさんいるだろう。そんな人達が、ユカには眩しく思えた。自分は一番大変なときにたまたまこの街にいらなくて、大変が過ぎ去った頃に帰ってきただけだ。自分は何もできない。弟を亡くして悲しむ友達を励ますこともできない。

ユカは思う。あたし、この街に戻ってきて良かったのかな。この街に居てもいいのかな……。

それから数日が経った。学校では三人は、表面上は一学期と変わりがなく過ごしているように見えた。目に見えて変わったところと言えば、せいぜい未来の登校時間が早くなったことぐらいだろうか。ただ、未来の隣の席のユカから見ると、未来の小さな変化は他にもいろいろと気付くことがあった。

「はあー、今日も六時限目まであるんだ……毎日毎日やるよねー」

午後の授業前の休み時間、マユは次の授業の教科書を取り出しながら、不満を述べた。二学期の開始が遅れたおかげで足りなくなっていた授業日数を補うべく、このところは毎日の授業時間が長くなっ

いた。今日も明日も明後日も、授業は六時限目までみっちりである。

「しょうがないよ、きつと先生達も大変なんだしさ、あたし達も我慢しようよ」

学校の方針をフォローしながら、教科書を取り出す未来。以前の未来だったら、絶対にマユに同調して不満を言っていたと思う。授業のことに限らず、掃除当番や日直などの雑用でも、未来はほとんど不満を言わなくなっていた。

「……未来、変わったね」

「……そうかな。変かな？」

「ううん。いいんじゃない」

マユに言われて、少し照れたような笑みを浮かべる未来。ユカから見ても、未来は以前ならないがしろにしていたようないるなことを、大事にしようとしているように見えた。それはきつと、好ましい変化なのだと思う。その成長が例え、弟の悠貴を亡くした悲しい思いの結果なのだとしても。

ただ同時に、ユカには未来が無理をしているように見えて仕方がなかった。泣いている未来を見てしまったせいというのもあるけれど、教室でも、未来はとてつらそうな表情を見せることがある。亡くなったクラスメイトの机を見ているとき。お母さんが亡くなった、まだ学校に出てこれないメグの机を見ているとき。一人で窓の外の景色を眺めているとき。そんなとき、ユカは未来に声をかけられない。声をかけようとすると思いついて思いつくことは、未来の泣き顔と、未来についた嘘のことだった。

どうしてあんな嘘をついちゃったんだろう。どうしてあのとき、

未来のそばにいてあげられなかったんだろう。未来に声をかけるのをためらう度に、後悔は深く静かに、ユカの心に降り積もっていた。

ある日の朝。ユカが登校して教室に入ると、未来は今日も先に登校していた。席に座って、窓の外を眺めている。席が窓際だからなのか、未来は何もしていないときはぼんやりと窓の外を眺めていることが多かった。それは一学期の頃から変わっていないのだけれど、今の未来の表情はぼんやりと、という様子ではなかった。なんだか、とてもつらいことを思い出して、それにじっと耐えているような痛ましい表情をしている。ユカは黙って未来の隣の自分の席に座った。挨拶すためらわれた。

「……あ、ユカ。おはよう」

ユカに気付いた未来が、パツと表情を変えて挨拶してきた。

……未来、本当に大丈夫？ 無理してないよね？ 頭の中にいろんな言葉を思い浮かべてはみたものの、結局そのどれも口にすることはできない。短い時間悩んだ結果、実際に口にできたのは、無難な挨拶だった。

「う、うん、おはよう」

このところ、ユカは未来とうまくいつていない。なんだか、全然自然な会話ができていなかった。やっぱり、未来に嘘をついたこと

を引きずっているのだと思う。未来と話そうとすると、申し訳ないという気持ちが先に立ってしまうのだった。自分でもなんとかしたいと思っではいるものの、あのときのことを正直に話すのであれば、泣いている未来から逃げ出したことまで話さなくてはならなくなってしまうため、なかなか踏ん切りがつかないでいた。おかげでどんどん自己嫌悪に陥る毎日である。

でも、いつまでもこのままではいられないし、いたくもない。なんとか少しでも話し合わないと。ユカはとにかく、思いついたことを口にしてみた。

「……未来、最近窓の外、よく見てるよね」

これだけのことを訊くのにも、かなりの勇気が必要だった。さっきの未来の表情は、本当にそれだけつらそうだったから。もしかしたら、余計なことを訊いてしまっているのかもしれない。でも、今はとにかく未来と話がしたかった。

「……うん。東京タワー……なくなっちゃったんだな、って思ってた」

それは、意外な返答だった。以前は教室の窓から、東京タワーが見えていた。それがなくなってしまったというのは、確かに寂しいことなのかもしれないけれど。でも、それだけであんなにつらそうな顔で外の景色を眺めるものだろうか。他に何か、理由があるような気がする。しかし、それがなんなのかまでは、怖くて訊けない。

ああもう！　あたしの意気地なし！　未来とちゃんと話したいんでしょ！？　ユカは自分に言い聞かせて、さらに話を続けようとする。

「そんなに……ショックだった？ 東京タワー、倒れちゃって」

その瞬間の未来の表情を、ユカはたぶん一生忘れない。まるで涙を流さないで泣いているみたいで、悲しい顔だった。

「……そうじゃないけど……」

ユカは、もう耐えられなかった。未来にこんな顔をさせるつもりじゃなかった。溢れてくる罪悪感を、止められなかった。

「ごめん……ごめんね、未来……」

思わずユカは、未来に頭を下げていた。もう、まともに未来の顔を見られない。未来の顔が見られなくて、ユカはずっと顔を上げられなかった。

「や、やだ、ユカ。どうしたの、なんで謝るの？ 顔、上げてよ、ユカ」

慌てた様子で、ユカに顔を上げるよう促す未来。でも、ユカは顔を上げられなかった。上げられるわけがなかった。気が付いたら、溜め込んできた汚い思いを、洗いざらいぶちまけていた。

「あたし、未来に嘘ついてたの。未来の家にお線香あげにいったとき、すぐに帰ったのって、ピアノのレッスンがあったからじゃないの。あたしが、未来の悲しい顔を見てるのがつらくなったからなの。ピアノなんて、地震で壊れちゃってて、レッスンなんてなかったの。未来、本当にごめんなさい！」

言ってしまった。言うだけ言ってしまった。何もかも吐き出した

頭の中は、真っ白に染まっていた。今のユカに意識できるのは、慣れた教室の床と、自分の心臓の鼓動だけだった。長い長い沈黙が続いた。こんなにも長く苦しい沈黙を、ユカは経験したことがなかった。やがて、未来がようやく小さな声を発した。

「そう……だったんだ……」

今、未来はどんな顔をしているんだろう。どんな気持ちでいるんだろう。ユカには全然想像できない。想像する余裕もない。未来の反応が怖くて、顔を上げられない。

「顔、上げてよ、ユカ」

すっかりした声で、促す未来。声を聞いただけで、未来が無理をしているのがわかった。ユカはようやく顔を上げた。このまま頭を下げ続けて未来の顔から目をそらしていたら、未来だけに無理をさせているみたいで、申し訳なくなったからだった。

「気にしないでいいよ、そんなこと。あたし、ユカが家に来てくれて、嬉しかったよ」

やだよ、未来。怒ってるなら、怒ってくれてもいいんだよ？ 呆れたなら、呆れてくれてもいいんだよ？ そんな優しい言葉をかけないでよ。あたし、嘘をついてたんだから、優しくしてくれなくてもいいんだよ？ お願いだから、そんな悲しい顔で笑わないでよ。

ねえ、未来。あたし達、まだ、友達だよね？

「じゃあ、ゴミはあたしが捨ててくるから。みんなは先に帰っていよ」

「そう、じゃあユカ、お願いね。また明日ねー」

その日の放課後。ユカは掃除当番だった。同じ班のクラスメイトを先に帰らせて、自分はゴミ箱を持ってゴミ捨て場へ。授業時間が長くなっているのに加えて、最近日は日が暮れるのも早くなってきた。空はすでにオレンジ色に染まりつつある。

二学期始まったの、ついこの前なのになあ……。人気のなくなつた校舎の中、そんなことを思つてため息をついてしまう。そうして、空のゴミ箱を持って教室に戻ってきたユカを待っていたのは、見知つた人影だった。

「……マユ」

「……帰ろ」

教室の隅にゴミ箱を戻して、教室の戸に鍵をかけて、退室。職員室に鍵を返して、二人並んで廊下を歩き出す。廊下の窓から差し込むオレンジ色の光が、二人の影を長く伸ばしていた。

「未来と、何かあった？」

マユは、遠慮なく訊いてくる。こういうところは、本当にマユには敵わない。今日、ユカと未来は、朝の一件からずっと口をきいていなかった。ユカから話しかけることもなかったし、未来から話しかけることもなかった。マユはずっと二人のことを気にかけていたようだったけど、特にそのことで何か訊いてくるようなことはしなかった。でも今、マユはユカを待っていてくれた。きっと、二人だ

けで話す時間を作ってくれたんだと思う。本当、自分には出来過ぎた友達だと、ユカは思った。

「……あのさ……」

「何？」

マユになら。マユになら、全部話してしまってもいいのかもしれない。友達とケンカして、自分が悪いようなら謝ればいい。今までユカはそのやり方で友達付き合いを乗り切ってきた。そのやり方で対処できないケースがあるなんて、全然思わなかった。まさか謝ることで友達を傷つけることがあるなんて、想像もしてなかった。もう、ユカにはどうすればいいのか、全然わからなかった。

「あたし……未来に、嫌われちゃったかもしれない……」

自分でもびっくりするぐらい情けない声だった。こんなに参っているつもりはなかった。こんなに落ち込んでいるつもりはなかった。自分のことは、もっと鈍感な人間だと思っていた。未来の家に行ったとき、自分は薄情な人間かもしれないと思ったのが嘘のようだった。

「……は？　なんで？　なんでそんなこと思うの？」

マユはそんなユカの言葉が不思議でたまらない様子だった。ユカは全部話すことにした。もう、心のブレーキはとくに壊れていた。

「この前さ……未来の家に、弟君の仏壇に、お線香あげに行つたでしょ？　あのとき、あたし、ピアノのレッスンあるからって言ってすぐ帰っちゃったよね？　あれ……嘘だったんだ。本当は、ピアノのレッスンなんてなかったの。ピアノは、地震で壊れちゃって、今

修理中だから。あのときすぐ帰ったのはね、未来の悲しい顔を見ているのが……つらかったからかなんだ」

「……………」

「でもあの後ね、学校で未来の顔を見る度に、未来に嘘をついたことを思い出しちゃって。そのせいで、未来とうまく話が出来なくてだから、今朝、未来に……嘘をついたことを話して、謝ったの。でもね、未来、全然怒らないの。すごく無理した顔で……家に来てくれて嬉しかった、って……」

話せば話すほど、惨めさが募っていった。自分が酷く卑屈で、矮小な人間に思えていった。マユは、黙って聞いていた。何か感情を溜め込んでいる気配が伝わってきたけれど、それでも、黙って聞いてくれていた。

「ねえ、マユ……未来、なんで怒らなかったのかな……。なんで笑って、あたしのこと、許してくれたのかな。あたしのことなんて、もう、どうでもよくなっちゃったのかな」

「バカじゃないの？」

唐突に、マユが声をあげた。その声は、怒気を孕んでいた。並んで歩いていたはずなのに、気がつけばユカはマユより前に進んでいた。ユカは慌てて振り返った。マユはその場に仁王立ちになって、ユカを睨みつけていた。

「あんたのことは前からバカだと思ってたけど！ もう、本当大バカ！ ここまでバカだとは思わなかった！ バカバカバカッ！ この、大バカ者！」

マユの剣幕に、気圧されるユカ。そりゃ、あたしはバカかもしれないけど……マユの言う通りかもしれないけど……ここまで好き放

題言われたら、少しだけ、ほんの少しだけ、反発心の芽が出てくる。

「そ、そんな言い方って」

「あんたなんにもわかってない！ 未来のこと、なんにもわかってないっ！」

ここまで言われたら、ユカも言い返したくなってくる。一気に、反発心が芽を吹いた。

「そりゃ、あたしはバカですよ！ 未来のことなんにもわからないよっ！ マユみたいに未来と付き合い長くないし、マユみたいに未来に優しい言葉もかけられないよっ！」

「あたしだって、なんにも出来なかったよっ！」

それは、今までユカが聞いた中で、一番大きなマユの声だった。今までで一番悲しくて、一番怒りに満ちた、マユの声だった。

「あたしだって、お葬式るとき、未来になんにも言っておげられなかった！ 泣いてる未来を、黙って見てただけだった！ でもね、あんた、知らないでしょ！？ あんたが帰った後、未来があんたのこと、なんて言ってたか、知らないでしょ！？ 未来、ユカが来てくれて本当に良かった、ユカが友達で本当に良かったって、何度も何度も言ってたんだよっ！？ あんたそんなこと、全然知らなかったでしょ！？」

ユカは、返す言葉を失った。言葉を返す気力も失った。ただ、自分を取り返しのつかない間違いをしていたのだということを、マユの言葉を聞いて、悟っただけだった。もう、何も言い返せなかった。

マユはずっと肩で息をしていて、その場から一步も動かなかった。

ユカはただ俯いて、沈黙を守り続けた。ようやくユカが言葉を発したのは、息を荒げたマユの呼吸が整い出した頃だった。

「マユ……あたし、どうしたらいいんだろ……」

「……知らないよっ！」

言い捨てて、マユは歩き出してしまった。容赦なく、ずんずんとユカの横を通り過ぎていく。ユカはマユを追うどころか、振り返ることもできない。やがてマユの気配も感じられなくなった頃、ようやくユカは、自分の膝が震えていることに気がついた。ユカは思う。

最低だ。あたし。

「あ……メグ、おはよー……久しぶり……」

翌朝。学校の玄関口で顔を合わせたのは、二学期に入ってずっと学校に来ていなかった、クラスメイトのメグだった。メグのお母さんが亡くなったことは、ユカも知っていた。メグとはそれほど仲が良かったわけではないけれど、それでも学校に来られないクラスメイトのことが心配だったことには変わりはない。

二学期に入ってすっかり様変わりしてしまった自分のクラスが、メグが戻ってきたことで少しだけ一学期の頃に戻ったみたいで、ユカは小さな安心感を覚えた。

「あ、おはよう……ってユカ、どうしたの、その顔!? 目の下に隈出来てるよ!？」

げっそりしたユカの様子に、驚くメグ。あ……やっぱりそう見えちゃうんだ……と、他人事のように考えるユカ。ピアノのレッスンがなくなったおかげで、後悔する時間だけはたっぷりあった。昨日の夜は、後悔と罪悪感で一睡も出来なかった。朝は親にも驚かれて具合悪いなら学校休んでもいいのよ!? と心配された。でも、今日休んでしまったら、どんどん未来やマユとの距離が離れていつてしまうような気がした。どんなに二人と顔を合わせづらかったとしても、そうなることだけは絶対に嫌だった。今なら、どんな罰にも耐えられるような気がした。

「だいじょーぶ……ちょっと夜更かししちゃっただけだから……」

言いながら、見当違いの方向に向かって歩いていくユカ。メグは慌ててユカの手を取った。

「ユカ、そっち二年生の教室だよ!? ああもう、こっちこっち!」

ユカの手を引いて、自分達の教室に向かって歩いていくメグ。ああ、あたし、メグに心配かけさせちゃった……メグの方がずっと大変なのに……ほんとダメダメだなあ……などと、ダメ人間まっしぐらな思考に耽るユカ。

「メグ……」

「何?」

「いろいろ大変だと思うけど……元氣出してね……」

手を引かれながら、蚊の鳴くような声でつぶやくユカ。思いがけ

ない言葉でも聞いたかのように、目をパチクリさせるメグ。

「何言ってるの？ 今元気が必要なのはユカの方じゃないの？」

そうだろうか。言われてみれば、そうかもしれない。ユカは妙に納得した。

「……ナイスツツコミ……」

相も変わらないげっそりした表情のまま、グッと親指を立てておどけてみせるユカ。それを見たメグは数秒固まった後、堪え切れなくなつたように、ぷつと吹き出した。そのまま、メグはしばらく笑い続けた。

はて……あたし、なんか面白いこと言つたわけ……？ いかんせん現在の精神状態が酷過ぎて、三秒前の自分の言動すら全く記憶に残っていない。我ながら、よくこんな状態で学校まで辿り着けたものだと思う。

まあ、いいや。メグ、笑ってるし。いろいろ大変だと思うけど、元気出してね。リサも心配してたよ。朦朧とする意識の中、そんなことを考えるユカだった。

意識が朦朧としていたのは、かえって幸いだっただのかもしれない。教室で未来やマユと顔を合わせるときに、それほど抵抗や緊張感を感じなかったからだ。というよりも、単にそんなものを感じる余裕すらなかったということなのだが。もちろん未来の方は、ユカの顔を見た途端びっくりした。心配して、声をかけてきてくれた。

「ユカ、どうしたの！？ 目の下に隈出来てるよ！？ すっごい顔色悪いよ、大丈夫？ 保健室行こうか？」

「だいじょーぶい……」

自分の席に突っ伏したまま、Vサインを出すユカ。もう自分で何を言っているのかすらわからない。未来はおろおろした様子で、マユの方を見る。しかし、マユの態度はそっけないものだった。

「どうせ、夜更かしでもしてたんでしょ。ほっとけば」

ああ、やっぱりマユ、まだ怒ってるよね。そりゃそうだよ。あれだけ怒ってたんだもん、そんな簡単に許してもらえないよね。でも、それでもいいんだ。怒ってるってことは、気にしてくれてるってことだから。まだあたしのことを、どうでもいい人間とは思ってないってことだから。未来を傷つけたあたしに怒ってるってことは、それだけマユが未来を大事な友達だと思ってるってことだから。だから、マユが怒ってくれてるのは、今のあたしにはとても嬉しいんだ。

その後、ホームルームが始まるまでの記憶は、ほとんどない。メグは、リサや未来と何か話をしていたような気がする。マユは自分の席で腕組みをして、ふくれっ面をしたままだ。そのうち予鈴が鳴って、先生が来て、今日の授業の予定などを話していたのだけれど、ほとんど何も覚えていない。隣の席の未来と、斜め後ろの席のマユが、ずっと心配そうな顔で自分を見守っていたことにも、ユカは気付いていなかった。

中学の入学式が終わって、初めて自分の教室の、自分の席に座っていたときのことだ。この中学には小学校の頃の友達是谁もいなくて、ユカはとても心細い思いをしていた。周りを見回しても、みんな自分よりこのクラスに馴染んでいるように見える。本当に大丈夫かな。あたし、このクラスで、友達作って、ちゃんとやっていけるのかな。不安と緊張で、息苦しくてたまらない。しばらくの間、机の上に張られた自分の名前をじっと見つめていたけど、それもだんだん苦しくなってきた。ど、どうしよう……。そうだ。隣の席の子、どんな子なんだろう。

あ、この子、入学式の時、入口で見かけた子だ。確か、お母さんが転んじやって、すごく恥ずかしそうな顔してたんだよね。でも、本当はお母さんのこと、心配してたんじゃないのかな。うん、きっとそうだよ。あんなに大きな声でお母さんの心配してたんだもん、きっと悪い子じゃないよね。名前、なんていうんだろう。

小野沢、未来。おのざわ、みらい。

へえ、この子、未来っていうんだ。いい名前だね。

話しかけてみようかな。話しかけたら、友達になってくれるかな。

「……ユカ。ユカってば！」

声に起こされて、夢から覚めた。顔を上げると、目の前に、未来の顔があった。

「……ふえ？」

寝ぼけ眼で、虚ろな返事をするユカ。どうやらホームルームの間に、寝てしまっていたらしい。反射的に時計を見ると、もうすぐ一時限目の授業が始まる時間だった。

「一時限目、視聴覚室に移動だよ？ 早く行かないと、遅れちゃうよ？」

そういえば、ホームルームで先生がそんなことを言っていたような気がする。なんでも、被災した生徒の心のケアだとかで、ヒーリング系のビデオを上映するのだとか何とか。教室を見回すと、すでに他のクラスメイトは視聴覚室に移動しているようだった。残っているのは、ユカと未来、それに教室の出口で腕組みをしてむっつりした顔をしているマユだけだ。マユ、待っててくれたんだ……。

「行こう？」

優しい顔で、手を差し出してくる未来。昨日から、ずっと考えてた。どうして未来は、弟君がいなくなつて、悲しくて苦しくてたまらないはずなのに、こんなにあたしに優しくしてくれるんだろう。未来は、ずっと無理をしてるんだと思つてた。学校に来るのも、授業を受けるのも、あたしと話をするのも、全部無理をしてるんだと思つてた。

でも、少し違っていたのかもしれない。無理はしているのかもしれないけれど、未来が優しいのは、未来がそうしたいからなのかもしれない。未来は、弟君がいなくなつて、悲しくて、つらくて、あたしには想像も出来ないぐらい、苦しい思いを抱えてきて。もう弟君と、話をする 것도、触れることも出来なくて。

だからきつと、今の未来には、傍にいた人が生きていてただけ

で、かけがえのないことなんだ。話しかけたら返事をしてくれて、手を握ったら握り返してくれて。今の未来には、そんなことが、すごく嬉しいことなんだ。それがあたしみたいな、出来の悪い友達でも。だから、未来はこんなに優しくしてくれるんだ。

今、やっとわかったような気がする。やっぱり、あたしには未来にしてあげられることなんて何も無い。

きつと、思い違いをしてたんだ。寂しいのは、あたしの方だったんだ。

未来が、あたしには見えない、ずっと遠くの景色を見ているような気がして、それがあたしは寂しかったんだ。

未来が、あたしにはわからない、深くて暗い悲しみを抱えているような気がして、それがあたしは寂しかったんだ。

あたしに出来ることなんて、最初から、なんにもなかったんだ。

違う、そうじゃない。

そうじゃなくて、あたしは未来に――。

「未来！」

ユカは突然勢いよく跳ね起きて、未来の手を取った。

「な、何？」

「ちよつと、あたしに付き合って！」

言い放って、そのままずっと教室の出口に向かって歩いてい

く。未来はびっくりして、引きずられていくようにして、ユカにっ
いていった。教室を出て、ユカは視聴覚室とは反対方向に歩いてい
く。

「ち、ちょっと、待ちなさいよ！ そっち、視聴覚室じゃないよ！
？」

マユも、驚いてユカを呼び止める。しかし、ユカは止まるどころ
か、歩くペースを速めつつ、言い放った。

「マユも来て！」

「え……ええーっ!？」

「待ってよ、ユカ！ どこ行くの!？」

さすがに疑問をぶつけてくる未来。ユカは声を張り上げて答えた。
迷いはなかった。

「音楽室！」

「授業はどうするの!？」

「サボリ！」

ユカの頭は、妙なところで冴え始めていた。確かこの時間、どこ
のクラスも音楽室は使っていないはず。

「待ちなよ、ユカ！ いったいどういふつもりなの!？」

未来の手を引いて音楽室に向かうユカについていきながら、苦情

を唱えるマユ。何の説明もなく、未来も自分も巻き込んで授業をサボろうと言っているのだから、文句が出てくるのは当然である。

「だいたい、なんで音楽室なの？ あんた、まさかとは思うけど」「うん。これからピアノを弾くから、未来とマユに、あたしの演奏を聞いてほしい」

ユカのストレートな回答に、しばし絶句するマユ。ちょうど、音楽室の前に辿り着いたときのことだった。

三人とも立ち止まり、ユカはマユに向き直る。マユは心底呆れたような顔で、つぶやいた。

「……何考えてんの？ 授業サボってこんなこととして、未来が喜ぶとも思ってたんの？」

「ちょ、ちよつと、マユ」

容赦なくユカを糾弾するマユに、うろたえる未来。でも、ユカは引かなかった。マユから目をそらさず、ユカは答えた。

「未来のためじゃない」

それは、決定的な一言だったのかもしれない。こんなことを言ってしまったら、もう二人とは友達には戻れないかもしれない。でも、もう嘘をつくわけにはいかなかった。ここで自分の気持ちを誤魔化すようなことを言ってしまったら、今度こそ本当に、二人とは笑い合えなくなるような気がした。

頑張れあたし。負けるなあたし。ユカは、自分に言い聞かせる。

「これは、あたしのただのワガママなの。今、急にピアノが弾きなくなったの。でも、誰も聞いてくれないと寂しいから、未来とマユ

に付き合ってもらいたいただけなの。だから、あたしなんかほつといて、授業に行ってくれても構わないよ。ううん、きっとその方がいいと思う」

嘘は言っていない。自分は全部、本当の気持ちを言っている。これは全部、今自分が考えていることだ。本当は、とても怖かった。こんなことを言ってしまったら、未来とマユに嫌われて、もう友達ではいられなくなるような気がして、とても怖かった。ここで二人が自分から離れて行ってしまったら、自分はもう立ち直れないかもしれない。

でも、そうなくても仕方がないと思う。たぶん、後悔はしないと思う。今の自分が未来とマユに自分の気持ちを伝えられる方法は、きつとこれだけだから。一度嘘をついてしまった自分の言葉には、何の説得力もないと思うから。自分の気持ちを誤魔化しながら二人と友達で居続けるなんて、絶対に嫌だから。

「……行くよ、未来」

未来の手を掴んで、この場を立ち去ろうとするマユ。ああ、やっぱりこうなっちゃうのか……でも、悪いのは全部あたしなんだから、しょうがないよね……マユの方が、正しいよね……。

そんなことを考えて諦めかけたユカだったが、次の瞬間には、マユの足が止まっていることに気がついた。未来が、この場から動こうとはしなかったからだった。

「……ごめん、マユ。あたしも、サボりたくなっちゃった」

弱々しくも、意地の悪い笑みを浮かべる未来。マユはまた絶句して、やがて心底呆れたような表情をして、ガリガリと頭をかいた。そして、開き直ったように二人を非難する。

「あー、もう！　後で怒られるのは三人一緒なんだからね！」

ありがとう。ユカは、心の底から、そう思った。

「それはいいんだけどさ……音楽室、鍵、閉まってるんじゃないの？」

「あ、それなら大丈夫」

マユの冷静な指摘にも、ユカは慌てない。ポケットをゴソゴソと探り、一本の鍵を取り出した。誇らしげに頭上に掲げて、言い放つ。

「こんなこともあるのかとおー！」

どこからか、冷たい風が吹きつけてきたような気がした。未来もマユも、口をあぐりと開けて、固まっている。さ、寒い……。ああああ、だってだって、一回言ってみたかったんだよおおおお。

でも、今はこんなことでへこたれてはいられない。ドン引きされたって、構うもんか。

ユカは音楽室の防音扉に鍵を差し込んで、解錠する。練習に使っているピアノが地震で壊れたと先生に話したら、いつでも学校のピアノを使っていいいからね、と言って預けてくれた鍵だった。

いつでも、というのはもちろん授業中でも、という意味ではないのだけれど、ここは都合の良いように拡大解釈することにする。

先生、せっかく貸してくれた鍵なのに、授業のサボリなんかに使

っちゃってごめんなさい。

「適当に座って」

ユカは音楽室に入るなり、未来とマユに促した。まるで自分のテリトリーであるかのような振る舞いである。

「何偉そうにしてんのよ」

言いながら、適当な席に座る未来とマユ。三人だけの音楽室は、なんだかすごく新鮮だった。見慣れている教室のはずなのに、普段は味わえない授業中の静寂に包まれた室内はまるで特別な空間になったみたいで、ちょっとわくわくする。

ユカはぺこりとお辞儀をすると、ピアノの蓋を開いて席につき、軽く音階を奏でて久しぶりの鍵盤の感触を確かめた。

大丈夫。ずいぶんと久しぶりだけど、絶対弾ける。弾いてみせる。ユカは、演奏を開始した。

未来。本当にごめんね。あたしね、酷いこと考えてたんだ。あたしね、未来の頭の中から、弟君なんていなくなっちゃえばいいと思ってたんだよ。

だって、未来の悲しい顔を見たくないんだもん。悲しくてつらいのを我慢して平気そうにしてる、未来の顔を見たくないんだもん。そんな未来に、なんて話しかけたらいいのか、わからないんだもん。本当、自分勝手に、酷い友達だよ。はつきり言って、友達失格だよ。こんなあたしに、未来にしてあげられることなんて、あるわけないよね。

だから、この曲は未来のための曲じゃない。この曲は、あたしが自分の気持ちを伝えるための曲。わがままで一方的で、空気を読まないただの自己主張。未来の悲しい気持ちは、あたしにはわからない。本当の悲しみを知らないあたしには、未来の気持ちはわかってあげられない。

だからこの曲は、悲しい曲じゃない。これは、嬉しい気持ちを伝える曲。未来とマユがあたしの友達でいてくれたことへの、感謝の気持ちを伝える曲。

あたしね、静岡から東京に戻ってきてから、ずっと引け目を感じてたんだ。地震があったときに東京にいた人はみんな大変な思いをしてたのに、あたしだけ何事もなかったみたいに平気だったから。亡くなった人がいっぱいいて、ケガをした人がいっぱいいて、家が壊れちゃった人がいっぱいいて。そんな中で、あたしだけこんなにラッキーで、ずっと申し訳ないと思ってた。

でも、もうそんな風に考えるのはやめようと思う。あたしは、もっと素直に、家族が無事だったことを、家が壊れなかったことを、友達が無事だったことを、喜ぼうと思う。引け目を感じて後ろめたく思うのは、もうやめようと思う。

その代わりに、いろんな人にありがとうって伝えようと思う。壊れちゃった街を直そうとしている人たちに、ケガをしたり悲し

い思いをしたりしても頑張っている人たちに、地震でも壊れなかった頑丈な家を建ててくれた人たちに、ありがとうって伝えようと思う。

未来とマユにも、たくさんたくさん、ありがとうって伝えようと思う。

未来、マユ。初めて二人と話をしたときのこと、覚えてるかな？あのとときあたし、初めて入った教室の中で誰も友達がいなくて、本当に心細くて、すごく寂しかったんだよ。だから、未来とマユがあたしに話しかけてきてくれて、本当に嬉しかったんだよ。未来とマユにとっては、たまたま席が近かっただけのことなのかもしれないけれど。未来とマユにとっては、あたしじゃない誰かでも良かったのかもしれないけれど。でも、あたしは未来とマユがあたしの近くの席でいてくれて、本当に良かったって思ってる。未来とマユが友達になってくれたから、あたし、この学校でもやっていけそうだって思ったんだよ。だから、地震があった後、未来とマユが無事だったってわかったときは、本当に嬉しかったんだよ。

未来。悲しくて苦しくてたまらないはずなのに、毎日学校に来てくれて、ありがとう。

マユ。未来を傷つけちゃったあたしを、ちゃんと怒ってくれて、ありがとう。

未来。マユ。あたしの前から、いなくならないでいてくれて、ありがとう。

終わっちゃった……。最後の一音まで、弾き終わってしまった。曲の余韻に浸るのも、束の間のことだった。だんだん、頭の中が冷静さを取り戻してくる。静寂の中、心臓の鼓動が、やけにうるさく感じられた。

あたし、もしかして、今、とんでもないことしてるんじゃない……授業サボっちゃったし、音楽室無断使用してるし、未来とマユも巻き込んだし……ああああ、何これ、すごい恥ずかしい。穴があつたら入りたいよおお。

拍手が聞こえた。最初は一人分の拍手だった。それがすぐに二人分の拍手に変わる。未来とマユが、演奏を終えたユカに、拍手をしてくれていた。

ああ、そうだね……。あたしが二人を巻き込んだんだもん、ちゃんと二人と向き合わなきゃ……。なかなか鳴り止まない拍手の中、ユカは意を決して立ち上がる。まだ二人の顔を直視する勇気が持たなくて、すぐにぺこりとお辞儀する。拍手は鳴り止まない。ユカは、なかなか顔を上げられない。まずい。泣いてしまいそうだ。

ようやく拍手が鳴り止んで、最初に声をかけてくれたのは、マユだった。

「……良い演奏だったよ。ユカのこと、ちょっとすごいと思ったかも」

はは。マユ、ありがと。お世辞でも嬉しいよ。久しぶりだったからあんまり上手く弾けなかったと思うけど、それでも二人が最後まで聞いてくれただけで、嬉しかったよ。ああもう、あたし何やってんだろ。そろそろ顔を上げないと。未来とマユの顔を見るのは怖

いけど、それでも前に進まない。

そう思っようやく顔を上げたユカは、未来の表情を見て、目を疑った。

み、未来……なんで……なんで、ダダ泣きしてんの！？

ウソ、だって、今弾いた曲って、悲しい曲じゃないはずだよ？
どっちかって言ったら、明るい曲のはずだよ？

たぶん、泣くような曲じゃないはずだよ？

も、もしかして……あたし、また、やらかしちゃった……？

あああ、ど、どうしよう、未来、ごめんね、ごめんね、こんなつもりじゃなかったんだよおお。

やっぱり、やっぱり、未来に嫌われるのは、嫌だよおお。

「み、未来……あ、あのね……」

恐る恐る、未来に歩み寄っていくユカ。ど、どうすればいいんだろ。ああもう、未来の顔、涙と鼻水でグシャグシャだよ。とにかく、顔を拭いてあげないと。ハンカチ、ハンカチ。ユカはポケットの中を探ろうとする。そのとき、思いがけないことが起こった。未来は、ユカに抱きついていた。

え、えええええ！？ こ、こんなの、全然どうすればいいのかわからないよ！ ああもう、マユ、何かフォローしてよ。なんで微笑ましいものでも見るみたいな目で見守ってんの！？ ああ、未来、そろそろ泣き止んでよ。あたしこっいうとき、どうすればいいのか、全然わからないよ！

ねえ、未来。もしかして、今、未来が泣いてる理由ってさ。

あはは、そんなわけないよね。危ない危ない、すごい勘違いするところだったよ。

ねえ未来、いい加減泣き止んでよ。

これ以上こんな状態が続いたら、あたしバカだから、本当に勘違いしちゃうよ？

未来が小さな子供みたいになかなか泣き止まないの、頭の後ろを、そつと撫でてあげた。

なんだか、ちよつとお母さんみたいになった気分。

あたし、知らなかったよ。未来って、意外と涙もろかったんだね。

音楽室の扉が勢いよく開いたのは、そのときだった。

「あなた達、こんなところでいたい何やってるの!？」

三人はもちろん職員室に連行されて、説教された。未来が泣き腫らした顔をしていたせいか、そんなにきついお咎めは受けなかったのだけれど、それでもユカは心の底から反省した。

先生、授業サボって、本当にごめんなさい。音楽室を無断使用して、本当にごめんなさい。

もう二度とこのようなことは致しません。本当に、すみませんで

した。

当然、音楽室の鍵は没収された。こりやもう、ピアニストになるのは無理かもね。

お母さん、小さい頃からピアノを弾かせてくれたのに、本当にごめんなさい。

「……まったく、信じられないよね。今どき先生に説教されて廊下に立たされるとか、あり得ないから。全部ユカのせいなんだからね！」

廊下で反省中の身なので小声ではあったが、これでもかと言わんばかりにユカを罵倒するマユ。先生の説教よりも、よっぽどこたえる。本当に、なんでこんなことしちゃったんだろう……。ああ、あたしって、こんなにもバカだったんだなあ。知らなかったよ。

「……ごめん……」

マユに謝りながら、ちらりと未来の顔を窺ってみる。精神的にそれなりにへこんでいたので、思わず「未来はあたしの味方だよね？」などと、厚かましいことを言ってしまうそうになった。でも、さすがにもうそんなことが言えるほど無神経ではいられない。あたしも、少しは空気を読むようにならないと。

「……ほんと、しょうがないよね、ユカは」

ああ。未来が、ジト目であたしを睨んでる。

「だいたいさ、どう考えても主犯はユカなのに、あたしらと同じ扱
いつてのが納得いかないよね。ユカは立たされるついでに、水の入
ったバケツでも持つべきなんじゃないのー？」

未来のジト目。未来の皮肉。未来の呆れた顔。

あれ、おかしいな。なんでこんな気持ちになるんだろう。

別に優しくされてるわけじゃないのに、どっちかって言えば冷た
くされてるのに、なんでこんなにあったかい気持ちになるんだろう。
あたし、変になっちゃったのかな。

「え、えー……ヒドイよ、未来」

「あはは、いいねそれ。ユカ、今すぐバケツに水汲んできなよ」

マユも未来に同調する。うう、なにもう、二人してよってたか
つて。

「やだよお、バケツ持つなんて。クラスのみんなに笑われるよー」

「反論は認めない！ 被告を、バケツ持ちの刑に処す！ 酌量の余
地はないと思え！」

「じゃ、酌量って……マユ、そんな難しい言葉、よく知ってるね…

…」

「えー、このぐらいキホンでしょー？」

「……ぷっ。くっくっく」

あ。未来、笑ってる。

「……ぷっ。あっはっは」

つられて、マユも笑い出す。未来とマユは、むくれた様子のユカ

を挟んで、声をあげて笑い始めた。

ユカだけは最後まで、むーと唸りながら抵抗していたものの、やがて我慢できなくなってくる。

とうとう観念したように、ユカも加わって、三人で笑い始めた。

たぶん、地震の前と同じようにはいかないと思う。

未来はきつと、弟君がいなくなつた悲しい気持ちを抱えたまま、笑つてる。

あたしは、未来を傷つけて後悔した気持ちを引きずつたまま、笑つてる。

マユのことは、あたしはバカだからよくわからないけれど、何も悩んでないわけではないよね。

いつか、マユのこともわかつてあげられるようになったらいいなと思う。

きつと三人とも、地震の前と同じようには笑えない。

でも、それでも、今、三人で一緒に笑つてる。

前と同じではないけれど。何もかも元通りというわけにはいかなけれど。

それでも、また、三人で、一緒に笑えたんだ。

職員室の戸が勢いよく開いたのは、そのときだった。

「あなた達、静かにしなさい！　どうやら全然反省が足りないようね！？」

「「「じ、ごめんなさいっ！」「」「」

未来。マユ。先に謝っておくよ。こんな友達で、本当にごめんね。あたしは空気の読めないおバカさんだから、これから先もきつとたくさん迷惑をかけると思う。

困らせちゃったり、呆れさせたり、下手をしたら愛想を尽かされちゃったりするかもしれない。

でも、あたしはバカで鈍感だから、ゼツタイめげない、へこたれないよ。

この先どんなことがあったって、二人から親友の認定を取り消したりはしないから。

二人がなんて言ったって、困ったときは頼りにするし、悩んだときは相談するよ。

だから、未来、マユ。これから先も、覚悟してよね。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9233k/>

東京マグニチュード8.0二次創作 「二学期の、出来事」

2010年12月31日22時36分発行